

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方

～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～

I 研究テーマにかかわって

自然環境は全ての生き物の生活基盤であるが、人間はこれまで自然を破壊し、あたかも人間だけが特別な存在であるかのように自然に対して大きな負荷を与え、再生不可能ではないかと思われるような開発を行ってきた。その結果、地球は、大気汚染、海洋汚染、オゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨、水質汚濁、食糧問題、人口問題、エネルギー問題、絶滅が危惧される動植物の数々…。実に様々な環境問題を抱えるようになった。また、福島第一原発による放射能は、終わりの見えない最大の環境問題である。

これらの問題を解決するためには、私たちの生活と自然とのかかわりにどのような問題があるのかという実態を正しく把握し、その原因を追求することが大切である。また、環境問題を引き起こしている社会経済の仕組みも理解し、環境に配慮した仕組みに変革していく努力も大切である。私たち一人ひとりが、問題解決のために何をしなければならぬかを考え、実行していくことが必要とされている。

本部会では、まず、私たちが科学的な知識に裏付けられた環境に対する現状認識を深めるとともに、環境問題を自分の課題としてとらえ、主体的に取り組んでいけるような子どもの育成をめざしていきたい。そのためにも、子どもたちが自然に親しみ、自然の素晴らしさや不思議さに気付くことができるような環境学習の機会を重視して、環境に対する豊かな感受性を育てていきたい。

II 研究内容

1 学習会

資料を持ち寄っての学習会「植物の不思議」

2 研究授業

(1) 第4学年理科「植物のふしぎ」

授業者 武井 文明 教諭（勝沼小）

- ・ 植物が種や生命を維持しようとする力の素晴らしさと不思議さに気づかせるとともに植物と人間の生活との関連について考える。

(2) 第4学年理科「季節と生き物～冬～」(野外授業)

授業者 石原 喜久夫 教諭（牧丘第三小）

- ・ 動物や植物の冬越しの様子を観察したり、資料で調べたりして、秋の頃と比較し、それらの変化があたたかさの変化と関係があるのではないかと推測する。また、春、夏、秋の記録と冬の記録とを比較し、生き物のようすの変化とあたたかさの変化とを関連づけて考え、再びあたたかくなると生き物の様子がどのように変化するかを予想し、次の季節への活動の意欲を持つ。

3 一人一実践

部会員一人ひとりが日々実践していることを報告し、意見交換をする。

4 臨地研修

大蔵高丸山の自然観察会

Ⅲ 成果と課題

1 学習会

研究授業に向けて「植物の不思議」をテーマとして、部員一人ひとりが資料を持ち寄り学習会を行った。自然の家での自然体験活動や学校林を利用した自然学習会、種の発芽についてなど、さまざまな取り組みが紹介され、今年度の研究授業や一人一実践につなげることができた。

2 研究授業

8月の授業研究では、4年生の児童が植物のタネ以外のふえ方について図や写真、実物を見て学んだり、実際にアジサイの挿し木をしたりして、植物が種や生命を維持しようとする力の素晴らしさや不思議さを身近に感じることができた。また、人が植物の生きる力を利用してふやす方法もあることを知り、植物と人間との関わり方にも目を向けることができた。

2月の野外授業では、牧丘第三小学校の校庭や学校周辺の生き物を探し、見つけた生き物をカードに書いたり、デジカメに撮ったりして生き物の冬の様子を観察した。また、デジカメに撮った写真を大型テレビに映し、発表し合った。生き物をポイント制にして、ゲーム感覚で活動することで、楽しく身近な自然環境を学ぶことができた。

どちらの授業も、研究テーマにかかわる体験的な活動をメインとした内容であり、自然の素晴らしさや不思議さを、体験を通して気づくことができた。体験から得た気づきは、大人になっても忘れることはなく、環境問題を考える基礎を培うことができたのではないかと思う。

3 一人一実践

部会員一人ひとりの得意な分野を生かした実践が紹介された。低学年では、身近な自然を観察した実践や野鳥の鳴き声を調べる実践、ドングリについて知り食べようという実践、中学年ではカイコを飼育した実践やエコソーラークッカーをつくった実践、高学年では、環境に関する新聞記事について自分の考えや意見を述べる実践などが報告され、情報交換を行った。

学年の発達段階に合ったさまざまな実践が報告され、環境教育や身近にある教材の活用の仕方について知ることができ、得た知識を日々の実践として活用することができた。また、身近な自然・環境のとらえ方の幅が広がり、周囲にあるすべてを環境教育に結び付けて考えることができるようになり、日常的な環境教育を心がけるようになった。

4 臨地研修

大月市と甲州市の境にある大蔵高丸山の自然観察を行った。湯の沢峠から湯の沢峠のお花畑を通り、山梨百名山である大蔵高丸山の山頂（標高1781メートル）まで散策した。コウゾリナやシモツケソウ、コウリンカなどの植物や、ジャノメチョウやキチヨウなどの昆虫を見付けることができた。教師の知識や関心がそのまま子どもにつながる環境教育は、教師自身の自然体験が豊富であることが大切であり、研究会での臨地研修は大変有意義であった。

(部長 青木 恵)